

クレオパトラの《愛》と《名誉》

—クレオパトラ論—

朱雀成子

I 序

クレオパトラは、シェイクスピアの書いた女性の中で、最もその評価が問題となる女性であろう。実際、テキストの中でも彼女は登場人物によって「娼婦」(“strumpet, whore, trull”), 「ジプシー女」(“gypsy”) とか「魔女」(“witch”) と呼ばれる一方では、愛の女神ヴィーナス、あるいはアイシスの女神にも誉えられており、その評価はまちまちである。批評家は、彼女に好意的なドーヴァー・ウィルソン、ウィルソン・ナイト、H. C. ゴダードなどを除いては、多くは彼女に対して極めて批判的といえよう。たしかに《愛》という面だけからみると、彼女は、ジュリエットやデズデーモナのように唯一人の男性を愛したわけでもないし、愛のために死んだとも断定できないので、非難を免れないであろう。しかしながら我々が忘れてはいけないのは、彼女が単なる一人の女性ではないということである。彼女はエジプトという国の女王である。このことを無視すると彼女への評価は極端に片寄ったものになるであろう。彼女は女王という、国の運命を背負った公けの人でもあるから、彼女にはアントニーと同様に《名誉》も大切である。だからアントニーと同様、時にはこの《名誉》のために自分の《愛》を曲げなければならないこともある。クレオパトラが《愛》と《名誉》の選択を迫られるのは、アクティアムの海戦以降の第三幕第七場からである。この第三幕第七場を境として、前半ではアントニーの《愛》を追い求めるクレオパトラが、後半ではアントニーから《愛》を求められるにもかかわらず、《名誉》を優先させるクレオパトラが表現されている

のである。従来、アントニーの《愛》と《名誉》はしばしば論議されてきているが、クレオパトラについてはあまり問題にされていないように思う。本稿では、一人の女性でもあり、同時にエジプトの王者でもある、《愛》と《名誉》の二面性をもつクレオパトラを、アントニーの《愛》と《名誉》と対比しながらみていきたい。

II アントニーの《愛》を追い求めるクレオパトラ

劇の前半においては、エジプトでは対外的な事件が発生しないので、クレオパトラは女王としての《名誉》を考える必要もなく、彼女は何とかアントニーの《愛》を保持しようとしている。一方、アントニーは彼女への《愛》よりも《名誉》を優先してローマに行ってしまう。ここではアントニーがローマ行きを告げるまで (I. i—I. iv) と、彼がローマに行っている間 (I. v—III. vi) に分けて論じよう。

(1) アントニーがローマ行きを告げるまで (I. i—I. iv) 劇の冒頭においてすでにクレオパトラは、アントニーがエジプトを離れ、《名誉》のためにローマへ帰国するのではないかという不安を抱いているように思える。冒頭の二人の会話は、この彼女の不安から生じたと考えられるのである。

Cleo. If it be love indeed, tell me how much.

Ant. There's beggary in the love that can be reckon'd.

Cleo. I'll set a bourn how far to be below'd.

Ant. Then must thou needs find out new heaven, new earth.

(I. i. 14-17)⁽¹⁾

この会話は従来、主として次の二通りに解釈されている。すなわち、一方ではローマ軍人ファイロのように「娼婦の道化」(“a strumpet's fool”) (I. i. 13) になり下がったアントニーの愛に溺れる姿が描かれていると解釈するか、他方では愛の絶対性を歌いあげ、宇宙的なスケールの愛に生きる恋人達を描いている、と採るかである。しかし私は前述のように、クレオ

(1) 以下引用は M. R. Ridley 編のアーデン版による。

パトラがアントニーの《愛》に不安を抱き、愛の限界を聞きただそうとし、アントニーは彼女の納得のいくように答えてやっていると解釈したい。まず、この時の二人の状況を考えてみよう。アントニーとクレオパトラは約十年間エジプトで愛の生活を営み、二人の子供までいるのである。もし二人の気持が全く一致し、充実した愛の日々を送っているならば、クレオパトラはなぜ愛の限界を執拗に聞きたがるのであろうか。アントニーはここで彼女に自分の愛が無限だと答えており、その証としてこの直後、ローマからの使者を一度は退けていながら、翌日になるとローマの事を懸念して⁽²⁾ 使者に会い、妻の死を知らされる以前に「このエジプトの強い足枷を断ち切ってしまうねばならない。さもないと愛に溺れて自分自身を失ってしまう」(“These strong Egyptian fetters I must break, / Or lose myself in dotage.”) (I. ii. 113-114) とクレオパトラから離れようとしている。ファイロによればローマからの使者はこれまでも何度かアントニーを訪れ、彼はそれを無視してきたようである⁽³⁾ が、ここでアントニーが一度は退けた使者に翌日会い、急にローマに行こうと決心している事を考慮すると、アントニーの心が冒頭からすでにエジプトとローマの間で、すなわち《愛》と《名誉》の選択をめぐる動揺していたと考えるのが自然ではなからうか。従ってクレオパトラは、アントニーが自分を置いてローマに戻るかもしれないという不安を打ち消すために、愛の言葉を彼から聞き出そうとしたと解釈できる。

アントニーの愛に不安を抱くクレオパトラが、彼の愛を保持していくために取った方法は彼の「気を引く」(“tempt”) (I. iii. 11) という手である。侍女のチャーミアンは彼女に、もしアントニーを愛しているのだったら何事も逆らわないようにと忠告するが、彼女は「そんな事をすれば彼を失ってしまう」(“the way to lose him”) (I. iii. 10) と一笑に付してしまう。彼女は、男性に従順であればむしろ相手を退屈させ飽きさせてしまうのであり、

- (2) *Cleo.* He was dispos'd to mirth; but on the sudden
A Roman thought hath struck him. (I. ii. 79-80)
- (3) *Dem.* Is Cæsar with Antonius priz'd so slight?
Phi. Sir, sometimes, when he is not Antony, (I. i. 56-57)

新鮮さを保つ為にはいつも刺激を与えた方がよいと信じている。そこで彼女の愛の表現は、彼の目の前では愛の言葉を口にせず、むしろ彼に反抗し、怒らせ、手練手管を用い、時には辛辣な言葉で攻撃することとなるのである。以下、彼女の「気を引く」方法をみていこう。

まず冒頭の会話の直後、ローマの使者が登場した時、彼女はアントニーの愛を試すかのように、シーザーやアントニーの妻ファルヴィアの帰国命令かもしれないから使者に会うように、と執拗に勧める。彼女は本当はアントニーが使者に会うのを好まないのだから、これは明らかに彼の反応を計算しての言葉である。その結果、今しがた無限の愛を誓ったばかりのアントニーは会う気持になれず

Let Rome in Tiber melt, and the wide arch
Of the rang'd empire fall ! Here is my space,
Kingdoms are clay: . . . (I. i. 33-35)

とスケールの大きい愛の言葉を言うことになる。こうしてここではローマの使者を退けることで、アントニーは《名誉》を無視し、《愛》に生きようと言葉の上ではしているが、前述のように《愛》と《名誉》の葛藤の末、翌日には使者に会う。使者からローマの状況を聞いた彼は《名誉》のためにクレオパトラの束縛から逃れなければならないと決心してしまう。クレオパトラの方でもこの彼のローマ行きの決意をある程度察したようで、不安気に彼の居場所を2回にわたって (I. ii. 77, I. iii. 1) 捜している。だがまたしても彼女が彼に対して取る態度は

If you find him sad,
Say I am dancing; if in mirth, report
That I am sudden sick. (I. iii. 3-5)

という言葉に示されているように、彼の「気を引く」という手である。彼女は話しにやって来たアントニーの顔を一目見て彼のローマ行きの決意を読みとり「私は病気、気分がすぐれない」(“I am sick, and sullen.”) (I. iii. 13) と早速不機嫌に振る舞う。アントニーはローマ行きを口にしてもいないのに不機嫌なクレオパトラの態度に困惑するが、彼女は前述のように辛辣な皮肉を言うことで彼女の愛の表現をする。

I know by that same eye there's some good news.

What, says the married woman you may go ?

Would she had never given you leave to come !

Let her not say 'tis I that keep you here.

I have no power upon you; hers you are. (I. iii. 19-23)

この後も彼に対する攻撃はまさしく彼女の独壇場で、この場の19行から41行の約20行のうち、アントニーはたった4回 “The gods best know,” “Cleopatra,” “Most sweet queen,” “How now, lady ?” としか口を挟めない。残りは全部、彼女が妻のファルヴィアに嫉妬しての言葉である。彼女はこの時まだファルヴィアの死を知らされておらず、アントニーが自分を置いて妻のいるローマに戻ることに我慢できないのである。彼女は女王としてのプライドからも、彼が自分を捨て「結婚した女」(“the married woman”) (I. iii. 20) のもとに帰るのが許せない。

O, never was there queen

So mightily betray'd ! (I. iii. 24-25)

女王たるクレオパトラはシェイクスピアの他の女性とは違い、あくまで男性と対等、否それ以上でありたいわけで、たとえ自分の方から男性を裏切ることであっても、男性から裏切られることに我慢できないという風である。彼女が「あなたと同じ背丈がほしい。そうすれば思い知らせてやれよう。エジプト女王にも五分の魂があることを」(“I would I had thy inches, thou shouldst know/There were a heart in Egypt.”) (I. iii. 40-41) と言う時、我々は彼女が単なる一人の女性としてでなく、エジプト女王としての誇りを持って彼を愛していたことを知らされるのである。アントニーが42行からやっとローマの切迫した事情や妻の死を話し、《名誉》のために帰国せざるを得ないと告げても、彼女は安心するどころか今度は、妻が死んだというのに余りに冷淡だ、ファルヴィアの死によって、自分の死んだ際の彼の態度が推察できると非難する。結局、彼女は理由は何であれ彼をローマに戻したくないのであり、エジプトに、自分のもとに留まってほしいのである。プルタークのクレオパトラは、かつてジュリアス・シーザーと共にローマへ行きそこで生活しているが、シェイクスピアのクレオパトラはい

かなる時でもエジプトを離れることはないように思える。彼女とエジプトの関係は余りにも密接で、彼女の性格もこのエジプトの風土から醸し出されたようにさえ感じる。特に炎を思わせる情熱的な彼女の性格は、まさにエジプトの熱い太陽の下ならではという感じがするし、アントニーから《ナイルの蛇》(“my serpent of old Nile”) (I. v. 25) と呼ばれた彼女は、エジプト以外に住む地は無いように思える。たとえ彼女がどんなにアントニーとの別離を辛く思ったとしても、彼女が彼と共にローマへ行くことは考えられない。デズデモーナはオセローと共にいたいばかりに彼と共にサイプラス島へ行ったが、クレオパトラはアントニーを追ってローマへ行くことはない。彼女にとっては、アントニーがエジプトに留まることが自分たちの愛の生活の前提なのである。確かに彼女はエジプトの女王であるが、アントニーも世界の三分の一を担っているほどの人物である。もしアントニーがローマに帰らなければ、《名誉》を失い、ひいては身の破滅を招くかもしれない。それでも彼女は彼に《愛》を選ばせたいのである。後半のアクティアムの海戦以降、彼女自身は《愛》よりも《名誉》を選ぶが、彼には《名誉》よりも《愛》を選択させたがっており、ここに自己中心的な彼女の性格が伺える。しかし彼女がどんなに彼のローマ行きに反対しても、アントニーの決意は固い。この前半の彼は、クレオパトラに引きずられっぱなしの後半のアントニーとは異なり、自分のやりたいようにやるといった主体性がある。クレオパトラへの愛の言葉は宇宙的スケールではあるが、その実は後半にみる命を賭した真剣なものではなく、一時的な「遊び」(“pleasure”) (I. i. 47) である⁽⁴⁾。だから彼はクレオパトラとの今までの愛の生活を簡単に「自墮落」(“idleness”) (I. ii. 127) とも言える。ファイロやローマの人々が言うように、アントニーがクレオパトラへの愛に溺れて自分自身を見失うのはむしろ後半であり、ここではクレオパトラを説得できないとみた彼は彼女の嘲笑を無視し、決然と彼女のもとを去ろうとする。ここに至ってクレオパトラはそれまでの彼女の態度を変え、すがるように

(4) There's not a minute of our lives should stretch
Without some pleasure now. What sport to-night? (I. i. 46-47)

「一言」(“one word”) (I. iii. 86) と引きとめる。彼女は彼の「気を引く」ことで彼を自分のもとに引きとめようとしたが、それが無駄だとわかると、はじめてここで彼への愛を吐露する。

’Tis sweating labour,
To bear such idleness so near the heart
As Cleopatra this. (I. iii. 93-95)

94行の *idleness* とは、その前のアントニーのセリフの *idleness* を受けて⁽⁵⁾ 「あなたが *idleness* と呼ぶ私の愛の苦痛と激情」という意味で、愛しているが故に生じる別離の辛さを訴えている。しかし彼女は結局、「あなたは名誉にかけて帰らねばならないとおっしゃる。それなら私の愚かな言葉に耳をお貸しにならぬよう、神々があなたと共にいますように」(“Your honour calls you hence, / Therefore be deaf to my unpitied folly, / And all the gods go with you !”) (I. iii. 97—99) とローマ行きを認める。彼女の《愛》も《名誉》もアントニーの《名誉》に一步譲ったわけで、これは彼女が彼に譲歩した唯一の箇所といえる。

(2) アントニーがローマに行っている間 (I. v. - III. vi.) アントニーのいないエジプトは、クレオパトラにとって余りにも退屈な日々である。彼への思いをますます募らせる彼女に、チャーミアンは「あの方のことをお考えすぎです」(“You think of him too much.”) (I. v. 6) と注意する程である。彼女は、アントニーが今どこにいて何をしているのだろうか、歩いているのか、馬に乗っているのだろうかと思ひ詰めている。このような彼女を見るとアントニーだけを一途に、情熱的に愛したように思えるが実はそうではない。彼女の愛はアントニーだけを愛するという絶対的なものではない。彼女は過去においてアントニー以外にいろんな思性を愛してきているのである。そして彼女は過去の男性の事を恥とは思っておらず、自分がジュリアス・シーザーの生前「帝王のたべもの」(“A morsel for a

(5) But that your royalty
Holds idleness your subject, I should take you
For idleness itself. (I. iii. 91-93)

monarch”) (I. v. 31) だったことを誇り、又大ポンペイが彼女のことを「おのが命」(“his life”) (I. v. 34) とも眺め明かしていたことを懐しんでさえる。あえて憶測すれば、彼女は今のアントニーに対すると同様にジュリアス・シーザーや大ポンペイを愛していたのかもしれない。確かにその頃の彼女は「分別も青くさく、情も知らず」(“green in judgment, cold in blood”) (I. v. 74) であり、その愛し方は今ほど情熱的ではないかもしれない。しかしチャーミアンの口真似から、彼女がシーザーを「ああ、御立派なシーザー様」(“O that brave Cæsar !”) (I. v. 67), 「勇敢なシーザー様」(“The valiant Cæsar !”) (I. v. 69) と熱烈に賞賛していたことがわかる。それらはアントニーへの賛美「男のなかの男」(“My man of men”) (I. v. 72) と大して変わらない。彼女の「私はアントニーを誉めようとし、シーザーの悪口を言ったことがある」(“In praising Antony, I have disprais'd Cæsar.”) という言葉を聞く時、彼女にとっては常にいまという時が大切であり、彼女がいつも現実に生きる女性だということがわかる。つまり彼女はシーザーが相手の時はシーザーを彼女なりに一途に愛し、そしてアントニーを愛するようになると過去のシーザーよりも現在のアントニーの方が素晴らしく思えてくるのである。だから、彼女自身はアントニーを一番愛したように言っているが、確証はない。いずれにせよクレオパトラは、ジュリエットやデズデモーナとは異なり、その時々で色々な男性と愛の交わりを持ち、その時々で彼女なりに一途に思い詰めるタイプと言えよう。従ってもアントニーに万一のことがあれば、彼女は又、他の男性を愛するということが十分ありうる。彼女の愛は一人の男性を愛して死んだジュリエットやデズデモーナのように絶対的なものではなく、あくまでも相対的なものだと言えよう。しかし今とはとにかく彼女はアントニーへの愛を確信し、自分の愛を伝えるために、毎日ローマに使者を送っている。エジプトに人がいなくなっても構わないとばかりに次々と使者を送る彼女は、ほとぼしするような情熱の吐け口を求め、アントニーに愛を表現せずにはいられないのであろう。平穩無事な今のエジプトで、彼女にはアントニーの愛を保持することが何よりも大切なのである。

しかし彼への思いを募らせている彼女に、アントニー再婚の知らせがもたらされる。彼女は、躊躇しながら真実を告げた使者を短剣で殺そうとする。恐怖の余り逃げ出した使者を彼女は再び呼び戻し、「結婚なさったというのは本当かい？ もうこれ以上お前を憎うは思いませんぬ。たとえもう一度本当と言われても」(“Is he married ?/I cannot hate thee worsor than I do,/If thou again say ‘Yes’.”) (II. v. 89-91) と言いながら、使者が事実を認めると再び激怒し、アントニーの代りにと使者に罰を下そうとする。これは第一幕第二場でアントニーがローマの使者の持ってきた悪い知らせを冷静に受け止めたのとは対照的である。彼女はアントニーとオクティヴィアの結婚という現実がどうしても受け入れられず、使者が嘘を言ってくれたらいいとさえ願う。我々は、感情の赴くままに自己を曝け出し、女王の威厳も忘れて嫉妬に狂う彼女を見る時、彼女の愛がまさにイノバースも言うように暦にも物せかねるほど空前絶後の「台風」(“storms”) (I. ii. 147) であり、「大嵐」(“tempests”) (I. ii. 147) だということを知らされる。そして彼女がアントニーの結婚にこれほどショックを受けたことは、クレオパトラが結婚と愛を別々に考えてはいないということを示すものだろう。これは、彼女がアントニーの先妻のファルヴィアを嫉妬して「ファルヴィアを妻にしておきながら、それでも愛していなかったとどうしてそんなことが？」(“why did he marry Fulvia, and not love her ?”) (I. i. 41) と言っていることを考える時、一層明白である。彼女ですら、結婚には愛が、そして愛していれば結婚するという一般の女性と同じような考え方をしているわけで、やはり結婚にある種の神聖なもの、犯すべからざる掟を認めていることになる。これはアントニーが、結婚しないうちに、「エジプトに戻ろう。仲直りのためにこの結婚はするけれど、よろこびは東方にある」(“I will to Egypt: And though I make this marriage for my peace, I’ the east my pleasure lies.”) (II. iii. 37-39) と言って、結婚と愛を別々に考えているのと対照的である。

捨てられたと思ったクレオパトラは一度は彼のことを追うまいと思いな
がらも、やがてアントニーを取り戻そうと強気になる。

Let him for ever go, let him not— (II. v. 115)

彼女は問題の女性オクティヴィアがどんな女性かを見極め、その対策を練ろうとばかりに、彼女の容貌、年齢、気質、髪の色、背丈を聞きにやらせる。第三幕第三場のオクティヴィアについて語る使者とクレオパトラとの会話は非常に興味深い。第二幕第五場でクレオパトラを激怒させた同じ使者は、今度は彼女の機嫌を損ねないように、要領よく受け答える。注目すべきことは、彼女が使者にオクティヴィアの容貌、つまり外面的な事だけしか聞かないことである。まず使者からオクティヴィアの背が自分より低く、声も低いことを聞いた彼女は、「それはお気の毒さま。あの方の愛情は長続きしそうもない」(“That’s not so good: he cannot like her long.”) (III. iii. 14) と気をよくして言う。更にクレオパトラの「歩き方に威厳がありますか。お前が威厳というものを見たことがあるのなら思い出してごらん」(“What majesty is in her gait? Remember,/If e’er thou look’st on majesty.”) (III. iii. 17-18) という問いに対して使者は、「這うように歩かれます。動いているのも立っているのも同じこと。命なき物体、息なき塑像とさえ見えます」(“She creeps:/Her motion and her station are as one:/She shows a body, rather than a life,/A statue, than a breather.”) (III. iii. 18-21) と答える。しかしアグリッパによれば、オクティヴィアは「その美しさに値する夫は男の中の男とも言うべき人物をおいて他にないはず、その徳、その魅力、いずれも他の女人には求めて得られぬもの」(“whose beauty claims/No worse a husband than the best of men;/Whose virtue, and whose general graces, speak/That which none else can utter.”) (II. ii. 128-131) とされる女性であり、またメシーナスによっても「もし器量、才智、貞淑とそろって、はじめてアントニーの心に和らぎが訪れるものなら、オクティヴィアこそあの男に何よりの贈物となろう」(“If beauty, wisdom, modesty, can settle/The heart of Antony, Octavia is/A blessed lottery to him.”) (II. iii. 241-243) とされる程の女性である。このように比類のない女性と賛美されるオクティヴィアについて、使者は余りにも過小評価している。これは使者がクレオパトラの怒りを再び招きたくないからであ

ろう。クレオパトラは使者の答に「この男はなかなかの利巧者だよ。私にはそれが分かる。結局、何の取柄もない女なのだね。この男の目は高い」(“He’s very knowing, I do perceive ’t, there’s nothing in her yet. / The fellow has good judgment.”) (III. iii. 23-25) と満足気に言う。チャーミアンもクレオパトラを怒らせまいとして、彼女に口調を合わせ、使者を誉めそやしている。更にクレオパトラはオクティヴィアの年齢を聞く。

Cleo. Guess at her years, I prithee.

Mess.

Madam,

She was a widow—

Cleo. Widow? Charmian, hark.

Mess. And I do think she’s thirty.

Cleo. Bear’st thou her face in mind? is’t long or round?

(III. iii. 26-29)

使者は賢明にもオクティヴィアの年齢について、すぐには返答せず、まず彼女が未亡人だったことを話し、クレオパトラの軽蔑と安心を買った後、彼女が三十歳だと言っている。クレオパトラは三十八歳であるから、オクティヴィアが自分より若いのは気に入らず、かといって彼女は未亡人だったのであるからそれほど気を悪くする必要はない。それまではオクティヴィアの容貌を述べる使者の言葉に、逐一コメントしていたクレオパトラであるが、今度は何も言わずに話題を変え、オクティヴィアの顔が面長か、丸顔かを尋ねる。そして「並はずれて丸い」(“Round, even to faultiness.”) (III. iii. 30) と聞くと、「丸顔の女はたいてい馬鹿と相場がきまっているのだよ」(“For the most part, too, they are foolish that are so.”) (31) と我が意を得たりといわないばかりに満足している。使者は更に調子に乗って聞かれもしないのにオクティヴィアの額が低い、つまり美人の条件には程遠いことを断言している。クレオパトラが使者の言葉を本当に信じているのかどうかは疑問である。彼女が使者の大袈裟な言葉に気が付かないほど鈍感なのか、あるいは気が付いたにしても自分の方が背も高いし声も高く、顔は面長で威厳があり、額も広くて遥かにオクティヴィアに優ると虚栄心を満足させられたのか、とにかく上機嫌で黄金を与えている。第二幕第五

場で彼女の怒りを招いたこの使者は、ここで彼女を刺激しないように彼女におもねっており、役者が一枚上手である。

以上のように、クレオパトラのオクティヴィアについての質問は、すべて彼女の容貌、つまり外面的なことに限られている。オクティヴィアの人柄については何一つ聞いていない。これはクレオパトラの男性に関する考え方を表している。つまり彼女は、男性に愛されるのは女性の心根によるのではなく、あくまでも外面的な美だと信じているのである。それはこれまでの彼女の体験によるもので、彼女の美の証かもしれないが、要するに彼女は愛というものをそのような次元でしか捉えられないのであろう。彼女は「それにしてもあの男によると例の女はたいしたものじゃないらしいね」(“Why, methinks by him,/This creature’s no such thing.”) (III. iii. 39-40) と安堵し、彼はきっと戻って来ると確信する。そして実際、アントニーはオクティヴィアに少しも心を奪われない。彼は結婚しないうちから前述のようにいずれはクレオパトラの所に帰るつもりでいるし、結婚してもオクティヴィアとベッドを共にはしておらず、まさに愛のない政略結婚だったのである。『プルターク英雄伝』ではアントニーとオクティヴィアとの間に三人の子供がいることを考えれば、これは非常な違いであり、シェイクスピアはアントニーをクレオパトラに誠実な男性として描写しているように思われる。オクティヴィアを「女の鑑」(“a gem of women”) (III. xiii. 108) と評したアントニーは、彼女の貞淑さ、美しさ、清らかさ、完全さを認めていたと思われるが、彼女に対してあくまで冷静である。彼は夫と弟の間であって悩む彼女に

Let your best love draw to that point which seeks.

Best to preserve it: if I lose mine honour,

I lose myself: better I were not yours

Than yours so branchless. (III. iv. 21-24)

と言いつつ。ここで「名譽を失えば自分自身を失うことになる」と妻に言ったアントニーは、後にアクティアムの海戦でクレオパトラの為に《名譽》を失うことになるが、それでもなお悔いなかった。

一体クレオパトラとオクティヴィアの相違は何であろうか。アントニーをして彼女に対し冷静にさせるのは、一つは彼女と弟オクティヴィア・シーザーとの深い結びつきかもしれない。第三幕第二場の別れの場面で、今は自分の妻となった彼女が弟との別れを悲しみ、いつまでも未練を残す態度は、アントニーのような男性には苛立たしいことかもしれない。又、後半夫と弟の仲が険悪になった時、彼女は仲介のために弟の所へ行くが、アントニーがクレオパトラのもとに帰ったと聞かされ、結局弟のもとに留まる。彼女は夫と弟との間にあってどちらかといえば弟との結びつきが深く、アントニーに執着の無いことに我々でさえ物足りなく思う。彼女はアントニーと夫婦らしい生活をしていないことにも、又アントニーがクレオパトラのもとへ逃げたことにも恐るわけではなく、余りに自己を表現しない。イノバーバスも言うように、オクティヴィアは「清らかで冷たく、口数の少ない女性」(“of a/holy, cold, and still conversation”) (II. vi. 119-120) である。アントニーには、手練手管を用い(“She is cunning past man’s thought.”) (I ii. 143) ながらも思いきり情熱をぶっつけ、男性の胸に飛び込んで来るクレオパトラに対して、万事が受身とも言える貞淑なオクティヴィアは物足りないのではなからうか。炎を思わせるクレオパトラに対して、オクティヴィアは冷たく澄んだ水を思わせる。クレオパトラの動に対してオクティヴィアは静である。喜怒哀楽をあからさまに表現する子供のようなクレオパトラに対して、万事超越したかに見える大人のオクティヴィアは魅力に乏しい。アントニーがクレオパトラのことを「ナイルの蛇」と呼んでいたことや、又彼女の「今私の胸は世にも甘い毒で満たされている」(“Now I feed myself/With most delicious poison.”) (I. v. 26-27) という言葉を考える時、「蛇」と「毒」のイメージから彼女がその甘美な魔力でいかに男性を酔わせ、その理性を奪ってきたかが伺える。実際、ジュリアス・シーザーも大ポンペイも、アントニーも、そしてそれ以外にも多くの男性が彼女の魅力の虜になってきたのである。皮肉屋で常識家のイノバーバスでさえも

Age cannot wither her, nor custom stale

Her infinite variety: other women cloy
 The appetites they feed, but she makes hungry,
 Where most she satisfies. For vilest things
 Become themselves in her, that the holy priests
 Bless her, when she is riggish. (II. ii. 235-240)

と彼女を絶賛している。イノバースの言うこの「無限の変化」(“infinite variety”)(236)は、結局前に見た、男性の「気を引く」方法と相通じるものであろう。ただ貞節なだけのオクティヴィアとは違って、激しく愛したり、憎んだり、怒ったり、悲しんだり、愚弄したり、笑ったりと様々な感情の変化を見せるクレオパトラに、アントニーは一度は《名誉》を優先させて別れたものの、後半再び戻ってくることになる。

III アントニーから《愛》を求められるが 《名誉》を優先させるクレオパトラ

アントニーがクレオパトラのもとに戻って来た第三幕第七場からの後半では、二人の関係が前半とは逆になってくる。前半のアントニーはクレオパトラと愛の生活をしていたとはいえ、彼はローマの三執政官の一人であり、エジプトを統治し、ある意味では征服者であった。しかも《愛》よりも《名誉》を優先させ、前述のようにクレオパトラの方がアントニーに《愛》を求める立場にあった。しかし後半の彼はクレオパトラとの愛の生活を第一義的に考え、その愛は前半の遊び半分的なものではなく、命を賭するほど真剣である。

Ant. Egypt, thou knew'st too well,
 My heart was to thy rudder tied by the strings,
 And thou shouldst tow me after. O'er my sprit
 Thy full supremacy thou knew'st, and that
 Thy beck might from the bidding of the gods
 Command me. (III. xi. 56-61)

従ってアントニーはもはや征服者ではなく、クレオパトラの夫という感じ

がする。彼はシーザーには無断でクレオパトラにエジプトの領有を認め、更にシリアやサイプラス、リディアの絶対権を許した。又シーザリオンやクレオパトラとの間にできた自分の息子達を各国の王にしている。クレオパトラが「彼の統治権」(“his potent regiment”) (III. vi. 95) を譲り受けたことから、二人の立場は微妙に変化し、彼女はアントニーと同等の権力を握るようになる。いや、むしろ彼の心を一層捉えることによって彼の征服者になった⁽⁶⁾とも言えよう。ここでは種々の対外的な事件を通じて、前半で見た彼女の《愛》の本質を探り、かつアントニーから《愛》を求められながら女王として《名誉》を優先せざるをえない状況などを見ていこう。

まずアントニーとシーザーの決裂によってエジプトとローマは戦争に突入することになるが、クレオパトラはイノバーバスの忠告を無視して「王国の主」(“the president of my kingdom”) (III. vii. 17) として、又「男」(“a man”) (III. vii. 18) として出陣する決心である。エジプトの統治権を掌握した今、彼女はアントニーをリードしていく⁽⁷⁾ようになり、彼女は彼が陸でなく海で戦うことに積極的に賛成する。しかし「王国の主」としてアクティアムの海戦に臨んだ彼女は、恐怖に駆られアントニーを置いて逃げ出してしまふ。前半であれほど彼への愛に燃えていた彼女の行動にしては、余りに子供っぽく自己中心的である。彼女にはアントニーと共に苦難を分かち、勝利を得ようという気構えが欠如している。彼女は愛する者の為に強くなれる女性ではなく、この点では、クレオパトラより弱く見えるジュリエットやデズデモーナの方が、恋人や夫と艱難を乗り切ろうとする強さがある。前半のクレオパトラはまさにアントニーへの愛のために生きている感があったが、この事件を通して我々には、彼女が愛と言っていたものが、実はアントニーへの愛ではなく、あくまで自分を中心に考える自己愛にすぎないかもしれないと思えてくる。だから彼女はアントニーの心を真に理解するまでに至らない。彼女は後半のアントニーがいかに自分に

(6) *Ant.* You did know
 How much you were my conqueror, (III. xi. 65-66)

(7) *Can.* ... so our leader's led,
 And we are women's men. (III. vii. 69-70)

心を奪われ、自分が彼の征服者になっているかがわかっていない。前述のように愛というものを低い次元でしか捉えられない彼女には、この後半のアントニーの、命を賭けた真剣な胸の内が理解できないのである。あえて彼女の行為の弁護をすれば、彼女は常に自分中心に考える為にアントニーに及ぼす影響を考えず、あくまでも自分個人の行為として戦争の最中に逃げ出したということであろう。アントニーにしてみれば一心同体のつもりであったから、彼女の後を追ったのであるが、彼女にしてみれば究極では人間はやはり自分一人が大切なわけで、あくまでも自分とアントニーを切り離して考えていたということであろう。愛し合っていたように思える二人の気持に《ずれ》があったのである。この《ずれ》はこの後も二、三の場面で出てくる。こうして「剣が愛情のためになまくらになった」(“my sword, made weak by my affection”) (III. xi. 67) アントニーは、シーザーに敗戦してしまうが、落涙しながら許しを乞う彼女に、寛大な彼はすぐに許してしまう。

Cleo. Pardon, pardon !

Ant. Fall not a tear, I say, one of them rates

All that is won and lost: give me a kiss,
Even this repays me. (III. xi. 68-71)

「クレオパトラの涙の一滴が、手に入れて、しかも失ったすべてのものに匹敵する」と言うアントニーは、かってクレオパトラが望んだように、まさに《名誉》を捨て、《愛》にだけ生きようとしている。しかしクレオパトラは自分の為に《名誉》を失い、《愛》を選択したアントニーに対して《愛》だけをもって報いはしない。シーザーの使者サイディアスがシーザーの伝言を携えて来た時、彼女はアントニーの恋人としてではなく、あくまでもエジプトの女王として振る舞う。

Thid. He knows that you embrac'd not Antony,
As you did love, but as you fear'd him.

Cleo. O !

Thid. The scars upon your honour, therefore, he
Does pity, as constrained blemishes,

Not as deserv'd.

Cleo. He is a god, and knows
What is most right. Mine honour was not yielded,
But conquer'd merely. (III. xiii. 56-62)

このクレオパトラの言葉を聞いたイノバーバスが独白で言うように、彼女が本気でアントニーを見捨てようとしていると採るか、あるいは又彼女がエジプトの将来を考え、今はシーザーに「こびる」(“flatter”) (III. xiii. 156) 方が有利と判断したと採るか、いずれにせよ彼女はこの言葉によってアントニーとの《愛》を否定していることになる。たとえ口先だけにせよ、彼女はこれまでのアントニーとの《愛》を否定せざるを得なかったわけで、彼女の愛の程度が量れる。後半のアントニーが彼女を愛するのと同程度に彼女が彼を愛していれば、彼の名誉のためにまずこうは言えないからである。更にサイディアスの、アントニーを捨てシーザーの庇護のもとで暮らすようにという勧告に対しても、彼女は恭順の意を表わす。しかもサイディアスの求めに応じて手にキスを許す。これを目撃したアントニーの「この女の名は何という、かつてはクレオパトラと呼ばれていたが？」(“— what’s her name,/ Since she was Cleopatra ?”) (III. xiii. 98-99) という言葉は、まさにトロイラスの「あれはクレンダであり、クレンダでない」(“This is, and is not, Cressid !”) (*Troilus and Cressida*, V. ii. 146) という気持であろう。彼は彼女が「死んだシーザーの皿の上の冷たい食い残り」(“a morsel, cold upon/ Dead Cæsar’s trencher”) (III. xiii. 116-117), 又「ネーアス・ポンペイの食い散らした残り物」(“a fragment/ Of Gnaeus Pompey’s”) (117-118) であり、更にそれより激しい邪淫に身を溶かした数々の思い出があろう、と罵倒する。アントニーはそれまでクレオパトラの過去の男性達については何ら言及してはおらず、ここで初めて「浮気女」(“a boggler”) (110) だと非難している。アントニーも「女の言葉にいまだかつて『否』と言ったことのない人物」(“Whom ne’er the word of ‘No’ woman heard speak”) (II. ii. 223) であり、過去において女性経験が豊富だと察せられるのだが、少なくともこの後半のアントニーの愛は浮気でなく本物である。だ

からオクティヴィアス・シーザーの使者にキスを許す行為は、自分を見限りシーザーに乗り換えることを意味し、アントニーには許せないのである。「お前には、貞潔とはどうあるべきか、大よそ見当はついても、それが実際どんなものか解ってはいない」(“Though you can guess what temperance should be,/You know not what it is.”) (III. xiii. 121-122) という彼の言葉には、愛する女性に「貞潔さ」を求める真剣な胸の内が伺える。

しかしクレオパトラには彼の激しい怒りが解せない。「どうしてそのようなことを？」(“wherefore is this?”) (III. xiii. 122) と言うだけで、彼女は自分の行為を恥じてはいないのである。ここでも二人の考えに《ずれ》が見られる。アントニーは彼女を自分だけのもの、つまり自分の恋人あるいは妻とも思っているが、彼女は、敗戦した以上あくまでアントニーから自分を切り離して考え、日和見主義で行こうとしているのである。そしてサイディアスにはアントニーの恋人としてではなく、女王として振る舞ったわけである。女王としての彼女が、敗れたアントニーに従うことは、自分の破滅、ひいてはエジプトの滅亡を招く。だから彼女はシーザーを無視してアントニーと同じ道を歩むわけにはいかない。彼女がかってこれまでの征服者ジュリアス・シーザーや大ポンペイ、アントニーに服従したように、今度はシーザーに従わざるを得ないということであろう。後半のアントニーは彼女の為に《名誉》を失い、《愛》に生きたが、彼女はここで前半のアントニーの様に《名誉》を優先させたのである。しかしながら彼女は、アントニーとも一応これまで通りの関係を保つ気はあるらしく、自己弁明 (III. xiii. 158-167) をする。この弁明を聞いたアントニーは呆気ないほど簡単に機嫌を直し、「我々はまだやっっていける」(“we will yet do well.”) (188) と彼女を許してしまう。しかし二人の気持の《ずれ》はこの後も続き、あくまでも女王として臨むクレオパトラにはアントニーの胸の内を理解することはできない。たとえばシーザーとアントニーの二度目の決戦の前夜、アントニーは自分の敗北を予想して、兵士達のこれまでの忠節に一人一人感謝し、彼らに落涙させる場面 (IV. ii.) で、クレオパトラにはアントニーのそのような行為の理由が解せず、二度にわたってイノバーバスに

理由を尋ねている。アントニーにしてみればアクティアムの海戦で卑怯にも後を見せた恥をそそぐために、せめても勇敢に戦って《名誉》を回復しようとしているのであるが、シーザーに負けるかもしれないという「煩いごと」(“consideration”) (IV. ii. 45) は拭いきれない。アントニーの身になって考えたことのないクレオパトラには、彼の悲壮感が少しも伝わってこないのである。「おそらく二度とおれの顔を見ることもあるまい。いや、あっても、それは傷だらけの亡霊に違いない」(“Haply you shall not see me more, or if, / A mangled shadow.”) (IV. ii. 26-27) と一同に語るアントニーの言葉を聞いても、彼女が彼の死の影に怯えることはなく、彼女は女王として淡々としている。この淡々とした彼女の態度はこの後も続く。いよいよ決戦に出かけるアントニーがキスをしながら別れを告げる場面 (IV. iv. 29-33) でも、彼女は何も言わない。前半でローマ滞在中のアントニーの無事を懸念していた (II. v. 26-46) 彼女を知っている我々には、これが同じ女性とは信じられないくらいである。アントニーの出陣後、彼女は「あの方とシーザーが一騎打ちで、この大戦争の運命をおきめになったらいいのに！ そうしたらアントニーが——でも、今さら——」(“that he and Caesar might / Determine this great war in single fight ! / Then Antony —; but now—”) (IV. iv. 36-38) と諦めにも似た言葉をわずかに述べるだけである。

幸いにも戦いの第一日はアントニーの勝利に終るが、喜びの余り興奮気味のアントニーに対して、我々は再び意外なほど冷静な彼女を見出す。アントニーの無事を喜ぶ彼女の唯一の言葉は

Cleo. Lord of lords,
O infinite virtue, com'st thou smiling from
The world's great snare uncaught ? (IV. viii. 16-18)

で、喜怒哀楽の激しい、多弁な彼女にしては、余りにも物足りない。この第四幕第八場の総数三十九行のうち、クレオパトラのセリフはわずか四行で、残りはすべて勝利を有頂点に喜ぶアントニーのセリフである。シェイクスピアはアントニーとクレオパトラのセリフの量の対比によってクレオ

パトラの冷静さを印象づけようとしているのではなからうか。二日目の戦ではアントニーはシーザーに破れる。彼はその原因を「あのいかさまのエジプト女」(“This foul Egyptian”) (IV. xii. 10) が自分を裏切ってシーザーに売ったからだと言う。クレオパトラの背信についての真偽は、作品を読んでも明らかではない。アントニーの部下達は何も言及していないが、クレオパトラの宦官マーディアンは、一応否定している。クレオパトラ自身は、アントニーの激怒に対して「愛するものになぜそう憎々しげに？」(“Why is my load enrag'd against his love ?”) (IV. xii. 31) と言うだけで、否定もしないし肯定もしていない。G. W. ナイトやA. C. ブラッドレーらの批評家達も、“Antony believes Cleopatra has betrayed him.”⁽⁸⁾ という程度で、実際にクレオパトラが裏切ったとは断定していない。この点に関して筆者は、クレオパトラはシーザーに内通するほどずるがしこいとは思えない。第一、アントニーの死後、シーザーの意図を確かめ自殺することを思えば、彼女がこの時点でシーザーと協定した場合の自分の扱いも確認せずに容易に裏切るであろうか。しかも第四幕第十五場で彼女がシーザーに捕えられるのを恐れて廟から出ようとしなないことを考えると、彼女とシーザーの間には協定がなかったと考えるのが妥当であろう。更にこれを裏付けるのは第五幕第二場の、シーザーとクレオパトラが初めて会った時の会話である⁽⁹⁾。この時の会話にクレオパトラがシーザーに協力した様子は少しも見えない。従ってここの解釈は、クレオパトラが積極的にアントニーを裏切ったというより、ハーキュリーズがアントニーを見捨てたという音楽(IV. iii.)や、つばめがクレオパトラの船に巣をかけた(IV. xii.)という暗

(8) G. Wilson Knight, *The Imperial Theme* (Methuen & Co., Ltd., 1968), p. 306.

(9) *Cæs.* The record of what injuries you did us,
Though written in our flesh, we shall remember
As things but done by chance.

Cleo. Sole sir o' the world,
I cannot project mine own cause so well
To make it clear, but do confess I have
Been laden with like frailties, which before
Have often sham'd our sex. (V. ii. 117-123)

示のように、そしてアントニー自身も戦いの前夜に予想していたように、彼は負け、あるいは負けそうになって、クレオパトラはその情勢を見てシーザーにおもねざるをえなかったということではなからうか。かってシーザーの使者に手にキスをするのを許したように、彼女は両方の船が出会った時、今や形勢有利なシーザーに抵抗する不利を悟り、そこで「帽子を投げあい、長く会わなかった仲間同士のように祝杯を挙げ」(“They cast their caps up, and carouse together/Like friends long lost.”) (IV. xii. 12-13), 一応の礼を尽くしたと解釈できないであろうか。前々から計画的にアントニーを陥れようとしていたわけではなからうか。しかしともあれこのような態度はアントニーの恋人として取るべきものではない。クレオパトラは形勢不利なアントニーを見て、ここでも自分自身とエジプトの未来を考え、女王として《名誉》を優先させたのではなからうか。

クレオパトラはアントニーの今にも殺しかねない怒りに恐れをなし、前に逃げ込む。しかも今度ばかりは涙をもってしても彼の憤怒を和らげられそうもなく、最後の手段として自殺したと告げさせる。

—go tell him I have slain myself:

Say, that the last I spoke was “Antony,”

And word it, prithee, piteously. Hence, Mardian,

And bring me how he takes my death to the monument.

(IV. xiii. 7-10)

彼女は自殺という虚報でもってアントニーの機嫌を直そうとしており、前半と同様、ここでも「気を引く」方法が見受けられる。恋人に、少なくとも恋人だった男性に自殺したという虚報を伝えることは、普通の女性にはできないことである。彼女はアントニーにもどんな男性にも手に負えない女性である。アントニーは自分が支配したかもしれない世界を失ったことより、クレオパトラの心を掴んでいなかったことを嘆いていた時、彼は彼女の自殺の報に接する。彼は彼女の予想通りすべてを許す、いや「泣いて許しを乞う」(“Weep for my pardon”) (IV. xiv. 45) 気にさえなる。しかも彼はすぐさま彼女の後を追う決心をする。いずれは死ぬ覚悟をしていた彼ではあるが、彼女の死の知らせを聞くやいなや、その場で鎧を脱ぎ、決行しよう

とする。アントニーにとって彼女はまさに「灯」(“torch”) (IV. xiv. 46), すなわち生きる支えだったのである。しかし彼の自殺は失敗し、瀕死の状態にあった時、彼はクレオパトラの自殺が狂言だったことを知らされる。が今度は怒らない。死を目前にしているからであろうか。彼は彼女にもう一度会うことを、そして最後のキスを交したいとだけ願う。

I am dying, Egypt, dying; only
I here importune death awhile, until
Of many thousand kisses, the poor last
I lay upon thy lips. (IV. xv. 18-21)

しかし彼女は

I dare not, dear,
Dear my lord, pardon: I dare not,
Lest I be taken: (IV. xv. 21-23)

と廟から下りていくのを拒む。その理由はシーザーに捉えられ、ローマで凱旋の見世物になりたくないからである。彼女は殊の外、アントニーの妻オクティヴィアに自分の恥を見られるのを恐れている。しかし、虫の息の状態にある恋人に、このような理由で下りていくのを普通は拒否できるものではない。ここでも彼女は《愛》よりも自分の《名誉》を大切にしているのである。彼女は間接的にせよ、自分がアントニーを破滅させ、自殺させた原因であることには気づきもしない。彼女は自分が下りていくかわりに、危篤状態の彼の方を引き上げる。この自分の所に引き上げる動作はクレオパトラという女性をよく表現している。彼女はいつも自己中心にしか思考できないのである。自分以外のすべてのものは、自分の為に動くのであり、自分はいつも宇宙の中心にいるというような発想である。彼女は前半でアントニーがローマへ帰国しようとした時、自分ではエジプトを離れず、あくまでも彼がエジプトに留まり、《名誉》より《愛》を選択してほしいと願ったが、それもこのような発想と相通じるものであろう。彼女は恋人のために自己を犠牲にすることはできない。しかし引き上げられたアントニーはクレオパトラに何一つ怨言も言わず、シーザーに名誉と安全を求めように勧める。

Ant. One word, sweet queen:

Of Cæsar seek your honour, with your safety. O!

Cleo. They do not go together. (IV. xv. 45-47)

アントニーは彼女が自分の後を追って死ぬことを期待してはおらず、彼はあくまでも彼女を生かし、その名誉と安全が守られることを願っている。クレオパトラの方は「名誉と安全は両立しない」と答えているが、この言葉は、もし両立すれば生き延びようということを暗に意味している。アントニーとクレオパトラとの間では、彼女が《名誉》を脅かされる場合は死を選んででも、《愛》のためには死なないという了解ができていたようである。アントニーはこの時点では彼女を自分だけの恋人としてでなく、エジプトの女王と見なしているのであろう。だから彼はクレオパトラという名前では呼ばず、queen (IV. xv. 45) とか Egypt (18, 41) とか呼んでいるのである。後半、クレオパトラに裏切られるとはいかないまでも、苦い経験を何度かさされたアントニーは、死ぬ間際まで彼女の身を案じており、彼の愛の深さ、寛大さが痛感される。この事はクレオパトラにもある程度判っており、アントニーがまさに息絶えようとする時の彼女の言葉

Noblest of men, woo't die?

Hast thou no care of me, shall I abide

In this dull world, which in thy absence is

No better than a sty? (IV. xv. 59-62)

に、彼女がいかに彼の愛に頼り、その寛大さに甘えていたかが判る。彼が息絶えると彼女は初めてと言ってよいほど、本当に気を失う。イノバーバスは、彼女がごく些細な事で何回も死にそうになる (I. ii. 139) と言っていたし、我々も彼女が何度も気絶するふりを見てきたが、ここだけは本物である。アントニーの死がいかにショックだったかが判る。彼女がやっと正気に戻った時の言葉

No more but e'en a woman, and commanded

By such poor passion as the maid that milks,

And does the meanest chares. (IV. xv. 73-75)

に心境の変化が見受けられる。すなわち彼女はここでエジプトの女王と

いうより、彼女なりにアントニーを愛してきた一人の平凡な「女」(“a woman”) (73) になっている。彼女は彼が死んで初めて、彼が自分の「宝石」(“our jewel”) (78) であり、「灯」(“Our lamp”) (85) であったことを悟る。彼女はローマ人の流儀に従って、立派に死のうと自殺の決意を述べる。

...we have no friend

But resolution, and the briefest end. (IV. xv. 90-91)

この自殺の決意に関して、H. C. ゴダードは次のように述べている。

But from the moment when the dying Antony is lifted into her monument and she finds no word of reproach on his lips for what she has done, scales seem to drop from her eyes, and never from then on does she waver in her undeviating resolution to join him in death.⁽¹⁰⁾

つまりゴダードによれば、それ以前のずるがしこいクレオパトラを「古いクレオパトラ」(“the old Cleopatra”) とするなら、ここでアントニーの愛に答える「新しいクレオパトラ」(“the new Cleopatra”) が生まれた⁽¹¹⁾ というのである。又ドーヴァー・ウィルソンも、アントニーが死んだので彼女は自殺の決意をしたのであり、ローマでシーザーの凱旋の戦利品になる恥を避けるため死の覚悟をしたのではない⁽¹²⁾ と善意に解釈している。しかし A. C. ブラッドレーや G. バーカーなどは、彼女は恋人より生きながらえる気持はあったし、彼の後を追うという最初の考えは彼女にとって荷が勝ち過ぎる。彼女が自殺したのは自分がローマで見世物になることが明白になったからだ⁽¹³⁾ と解釈している。

(10) Harold C. Goddard, “Cleopatra’s Artifice,” *Antony and Cleopatra*, Casebook Series, ed. J. R. Brown (Macmillan, 1968), p. 135.

(11) *Ibid.*, p. 135.

(12) W. Shakespeare, *Antony and Cleopatra*, ed. D. Wilson (Cambridge, 1968), pp. xxxiv-xxxv.

(13) “She is willing also to survive her lover. Her first thought, to follow him after the high Roman fashion, is too great for her. She would live on if she could, and would cheat her victor too of the best part of her fortune. The thing that drives her to die is the certainty that she will be carried to Rome to grace his triumph. That alone decides her.”—A. C. Bradley, “Shakespeare’s Antony and Cleopatra,” *Antony and Cleopatra*, Casebook Series, ed. J. R. Brown (Macmillan, 1968), p. 82.

このようにクレオパトラの自殺の直接の動機をめぐって意見が二つに大別されるが、筆者はブラッドレーの意見を採りたい。アントニーの死後、彼女が女王ではなく一人の「女」だと感じ、彼の後を追おうとした気持は、その時点では真実だと思うが、この決心が最後まで持続できたかどうかには疑問の余地があろう。彼女のこれまでの生き方を回顧する時、彼女はジュリアス・シーザー、大ポンペイ、アントニー、そしてそれ以外にも次々と主を代えてきたたかに生き延びてきている。彼女はまさしく「ナイルの蛇」である。彼女がジュリアス・シーザーを敬愛していたことは前述したが、彼が死んだ時、彼女は彼の後を追わなかった。大ポンペイの時も同様である。ではアントニーだけが彼女にとって特別な存在であろうか。前述のようにアントニーだけが特別という証拠はない。過去に捉われず現実だけに生きてきた彼女は、その時々を男性を彼女なりに自己愛とも言える愛し方で愛したに過ぎない。アントニーは彼女の自殺の報を聞いてその場で鎧を脱ぎ、剣を取ったが、彼女はそうはしなかった。彼女は同じ死ぬにしても、後で見るように女王としての装いをして死なねばならなかった。この死ぬ決意を述べた第四幕第十五場といよいよ死ぬ第五幕第二場の間で、もし《名誉》と《安全》が両立すれば生き延びようというしたたかさを彼女は十分持っている。しかし彼女はプロキュリアスとギャラスが彼女の自殺を危惧して見張りを置いたことでシーザーの意図を察する。アントニーの死に際しては剣を取らなかった彼女が、この時は女王としての《名誉》を守るためすぐに死のうとする。彼女は、ロミオの死を見てすぐさま剣で自殺したジュリエットの真似はできないが、《名誉》が侵されそうな時はいつでも死ぬ準備ができていた。結局、彼女の自殺は阻止されるが、シーザーの意図を知った彼女にはますます死んだアントニーの偉大さ、寛大さが痛感される。

I dreamt there was an Emperor Antony.

O such another sleep, that I might see

But such another man ! (V. ii. 76-78)

クレオパトラをあくまで勝利のシンボルとしか考えようとしないシーザー

に比べ、彼女を女性として、又女王として愛してくれたアントニーを彼女は懐しく、恋しく思うのであろう。同情したドラベラから彼女はシーザーの意図をはっきり知らされるが、この時シーザーが初めて彼女に会いに来る。プロキュリアスにあればほど「死にたい」(“I would die.”) (V. ii. 70) と口走った彼女は、ここでは何ら自殺のことに言及しない。それはシーザーが子供を楯に彼女が自殺しないように感じたからというだけでなく、彼女に自殺の意志があるとわかれば捕われの身になることは、シーザーの意図を知った今、明白だからである。従って彼女はシーザーを欺く必要があるわけで、あくまで従順に振る舞う。セルカスの件は、シーザーへの服従の証として財産目録を見せ、それをセルカスに偶然暴露されたとも、あるいは彼女が生きたがっていることを示すためのセルカスと計ったお芝居とも解釈できる。が、どうとるにせよ、彼女はシーザーを安心させるために目録を見せたことにはかわりなく、シーザーもこの件で、とにかく彼女は自殺しないだろうと安堵している。クレオパトラは見事にシーザーを欺いたのである。シーザーが帰った後、彼女は

He words me, girls, he words me, that I should not
Be noble to myself. (V. ii. 190-191)

とシーザーの気持を全て続んでいる。初めてシーザーに会ったクレオパトラは、彼がアントニーとは違って情に流されない、あくまで冷静な人物だと知らされる。彼女を勝利の戦利品とだけ見なしているシーザーを出し抜くために、クレオパトラは「ナイルの蛇」と呼ばれた彼女にふさわしく、蛇の毒で死ぬ決心をする。

My resolution's plac'd, and I have nothing
Of woman in me: now from head to foot
I am marble-constant: now the fleeting moon
No planet is of mine. (V. ii. 237-240)

この言葉から、第四幕第十五場でクレオパトラがアントニーの死後自殺の覚悟をしたものの、やはり死ぬのを躊躇していたことがわかる。もし《名誉》さえ守られれば、彼女は生きるつもりだったのである。237-238行の“*I have nothing/Of woman in me*”は、今や覚悟を決め「女のような脆さ

はない」という意味であろうが、それと同時に、「自分の中に女はいない」、つまりかってはジュリアス・シーザーやアントニーを女としての武器を使って魅惑し、征服したのだが、シーザーにはそれが通用しない。今から「女としての武器を捨ててしまおう」という風にもとれよう。

クレオパトラの死の場面はアントニーのそれとは全く異なる。前述のようにアントニーの死の直接の契機は彼女の死の報であり、その死に方は世界の三分の一を背負った男にふをわしいものではなく、彼は彼女の恋人としてだけ死んでいる。一方クレオパトラは、「アントニーに再びキドヌス河で会う」(“I am again for Cydnus,/To meet Mark Antony.”) (V. ii. 227-228) とか、彼を「夫」(“Husband”) (286) とか呼んではいるが、彼の恋人として又は妻として後を追ったのではない。彼女は女王としての服装をし、冠をかぶり、女王として死んでいる。しかも侍医によれば彼女はできるだけ苦痛のないように、美しく死ぬるようにと安楽な死に方を捜し求めていたのである。シーザーも言うように、彼女の死に顔は「あたかも第二のアントニーを抗しがたい美のわなに誘いこもうとでもしている」(“As she would catch another Antony/In her strong toil of grace.”) (V. ii. 345-346) ように魅惑的で、彼女は最後まで美を演出し、「不死不滅」(“Immortal”) (280) でありたいと願っている。シーザーも「彼女はこちらの意図を察し、さすがは王者にふさわしく、乙れの行くべき道をとった」(“She levell’d at our purposes, and being royal/Took her own way:”) (V. ii. 334-335) というように、彼女は《愛》のためではなく、女王としての《名誉》を守るために、「連綿として伝わってきた王家の姫君にふさわしく」(“fitting for a princess/Descendeg of so many royal kings”) (V. ii. 325-326) 死を選んだのである。

IV 結 論

クレオパトラはシェイクスピアの書いた女性の中で最も興味深い女性と言える。イノバーバスも言うように、「無限の変化」、すなわち女王として

の威厳を備え、美しく機知に富み、情熱的であるかと思えば、残酷で淫ら、手練手管を心得、しかも臆病で子供のように自己中心的であったりする。彼女の中にはシェイクスピアの書いた種々の女性、つまりジュリエットやデズデモーナ、マクベス夫人、ガートルード、クレンダ、キャタリーナ、そしてソネットの黒婦人などが混在している。しかし、これらの女性とクレオパトラを明確に画す点は、彼女が一国の女王だということであろう。従って彼女には一貫して《名誉》を守り通そうとする態度がある。

ウィルソン・ナイトは、クレオパトラの行動の根源をなすものは愛だけであり、一方アントニーは《愛》と《名誉》の両方に仕えている⁽¹⁴⁾という意味のことを述べているが、クレオパトラには《愛》よりもむしろ《名誉》の方が行動の根源をなしているように思われる。確かに前半のクレオパトラはアントニーの《愛》を求め、それに明け暮れしていたが、後半になって《愛》と《名誉》の選択を迫られると《名誉》を優先させてしまう。しかもその《名誉》がシーザーによって侵されそうになった時、彼女は《名誉》を守るために死ぬのである。《愛》の為には命を絶てないが、《名誉》の為には命を捨てられるという点で、彼女はまさしく女王である。彼女のこの生き方は、前半のアントニーが《名誉》を優先し、後半では《愛》に生き、死をもって《愛》に殉じたのとまさしく対照的である。

(14) "...we must observe that love is the only root of her actions. She is thus undivided, a trader in love alone; whereas Antony serves two gods: 'love' and 'honour'."—G. W. Knight, *op. cit.*, p. 296.